

## 論文の内容の要旨

氏名：横田 将志

博士の専攻分野の名称：博士（政治学）

論文題名：東南アジアのサブリージョンにおける環境協力——ASEAN Way からの分析——

本論文は、東南アジアのサブリージョンにおける環境協力をリージョン・レベルの規範・行動様式である ASEAN Way に着目して分析するものである。①研究の背景・目的・方法、②国際政治を捉える新しい概念、③東南アジアのリージョン・レベルの規範・行動様式、④SIM エリアのヘイズ問題に関する協力、⑤メコン下流域における水資源に関する協力、⑥大メコン圏における生態系・生物多様性に関する協力、⑦まとめと結論、の順に議論する。

### 【研究の背景・目的・方法】

東南アジアでは、環境問題の解決を目指した国家間協力が行われてきた。そのなかでは、問題解決に向けた取り組みが進んでいる側面だけではなく、遅れている側面も見られる。この点からは、次のような問題意識が浮かび上がる。なぜ、東南アジアにおける環境協力では、取り組みの進んでいる部分と遅れている部分があるのか。取り組みを進めている点は、何か。遅れている取り組みを進めるためには、どうすればいいのか。

東南アジアの環境協力は、サブリージョン・レベルで行われてきた。サブリージョンとは、リージョンをかたちづくるアクターの一部で構成される地理的空間であり（図1）、リージョンのなかに存在するため、そこから一定の影響を受けると考えられる。このため、東南アジアのサブリージョンにおける環境協力を検討する際、リージョンとサブリージョンの関係性に着目することが有益だと考えられる。

本研究では、東南アジアのサブリージョンにおける環境協力での問題解決に向けた取り組みの実施を実現・促進する要因の特定を目的とする。これは、上記の問題意識に対応するものである。環境協力は、環境問題の解決のために行われるものであり、問題解決に向けた取り組みの実施が進んでいる場合はその要因の特定と強化が、遅れている場合はその原因の特定と克服策の検討が、それぞれ重要となる。

本論文は、「東南アジアのサブリージョンにおける環境協力は、非リージョン・アクターの関与がある場合、リージョン・レベルの規範・行動様式を克服し、対象とする環境問題の解決に向けたポジティブな成果を収めることができる」との仮説を立て、検証していくものである。仮説が立証されると、本研究で特定を目指す点については、非リージョン・アクターの関与によるリージョン・レベルの規範・行動様式の克服だと答えられる。なお、仮説中の「非リージョン・アクター」という言葉は、リージョン・アクター以外を指す概念である。東南アジアにとっては、東南アジア諸国連合（ASEAN）やその加盟国等がリージョン・アクターに、日本や中国等の域外国、ならびにアジア開発銀行（ADB）や国連環境計画（UNEP）等の域外国を含む国際機関が非リージョン・アクターに、それぞれ該当する。

本論文では、東南アジアのサブリージョンである、①SIM エリア（シンガポール、インドネシア、マレーシア）のヘイズ問題に関する協力、②メコン下流域（カンボジア、ラオス、タイ、ベトナム）における水資源に関する協力、③大メコン圏（カンボジア、ラオス、ミャンマー、タイ、ベトナム、中国の雲南省と広西チワン族自治区）における生態系・生物多様性に関する協力、の3つの事例から仮説を検証する（図2、図3）。

上記の仮説は、リージョンとサブリージョンの理論上の関係性から導き出される。リージョンとサブリージョンは、いずれも国際政治学の概念に当たる。このため、本研究は、国際政治学のアプローチを用いるものである。

### 【国際政治を捉える新しい概念：リージョンとサブリージョン】

国際政治の変容のなかで登場したリージョンという概念は、国際システム上の特定の地理的空間に位置する複数の国家によってかたちづけられる意思決定・政策実施空間を指す。リージョンの規模は

相対的なものであり、ある地理的空間をリージョンとした場合、その内部の一部アクターから形成される空間はサブリージョンに該当する。

リージョンとサブリージョンの関係性を検討すると、後者における国家間協力が前者の規範や行動様式によって規定されることがわかる。これは、サブリージョンがリージョン・レベルの規範や行動様式を採用し、国際システム上においては、規範や行動様式がアクターの行動と結果を規定するためである。

#### 【東南アジアのリージョン・レベルの規範・行動様式：ASEAN Way】

東南アジアのリージョン・レベルの規範・行動様式は、“ASEAN Way” と呼ばれるものであり、①主権尊重、②内政不干涉、③コンセンサス方式、④非公式性、の4点で構成される。これが国家間協力で重視・利用されると、協力関係の形成と維持が促進される一方で、協力の目的達成に向けた取り組みの実施が阻害される。

東南アジアのリージョン・レベルの規範・行動様式が ASEAN Way であること、および非リージョン・アクターが域外国や域外国を含む国際機関であることを踏まえると、本論文の仮説は、「東南アジアのサブリージョンにおける環境協力は、東南アジアの域外国や域外国を含む国際機関の関与がある場合、ASEAN Way を克服し、対象とする環境問題の解決に向けたポジティブな成果を収めることができる」と換言できる。主権尊重、内政不干涉、コンセンサス方式、あるいは非公式性に基づくアクターの行動の結果、問題解決に向けた取り組みの実施が遅れている場合、東南アジアのサブリージョンにおける環境協力は、ASEAN Way によって規定されているといえる。

#### 【SIM エリアのヘイズ問題に関する協力】

SIM エリアのヘイズ問題に関する協力は、ASEAN の枠組みを利用して行われてきた。ヘイズ問題とは、森林火災等から発生するばい煙とこれに起因する経済活動や生態系・生物多様性、人体等への悪影響を指す概念である。ASEAN におけるヘイズの予防・緩和に向けた取り組みは、主権尊重、内政不干涉、コンセンサス方式、および非公式性によって、実施が阻まれてきた。

SIM エリアのヘイズ問題に関する協力では、東南アジアの域外国を含む国際機関の関与時、ASEAN Way を克服し、問題解決に向けたポジティブな成果がもたらされた。現在の活動根拠である ASEAN ヘイズ協定は、形成時に ADB と UNEP の支援を受けた結果、非公式性を克服し、取り組みの実施に資する法的拘束力を有するものとされた。

#### 【メコン下流域における水資源に関する協力】

メコン下流域における水資源に関する協力は、ASEAN Way によって規定されてきた。メコン委員会から暫定メコン委員会を経て、現在のメコン河委員会（MRC）に至るメコン下流域諸国による政府間組織は、コンセンサス方式と非公式性によって維持されてきた。しかし、各委員会での水資源の協調的開発・利用の実現に向けた取り組みの実施は、主権尊重、内政不干涉、コンセンサス方式、ならびに非公式性によって妨げられてきた。

メコン河の水資源に関する協力では、東南アジアの域外国や域外国を含む国際機関の関与がある場合、ASEAN Way の克服が可能になると考えられる。東南アジアの域外国である中国の関与時に、ASEAN Way からの逸脱が見られた。メコン下流域各国と中国は、主権尊重と内政不干涉を重視する。この2点は協力関係の実現に寄与するものであるが、メコン委員会から MRC に至るまで、中国の参加は実現していない。

#### 【大メコン圏における生態系・生物多様性に関する協力】

大メコン圏は、ADB のイニシアチブによってつくりだされたサブリージョンであり、そこでの生態系・生物多様性の保全に向けた協力は、ADB の GMS プログラムのなかで行われてきた。そこでは、森林再生や生態系への依存度軽減等の取り組みが行われ、生態系・生物多様性の保全に向けたポジティブな成果が生み出されてきた。

GMS プログラムは、ADB がイニシアチブを握る。ADB の主導権は、日本をはじめとする東南アジア域外の先進国がもつ。この点を踏まえると、大メコン圏における生態系・生物多様性に関する協力は、東南アジアの域外国がイニシアチブを握る国際機関の関与によって、ASEAN Way を克服し、協力の目

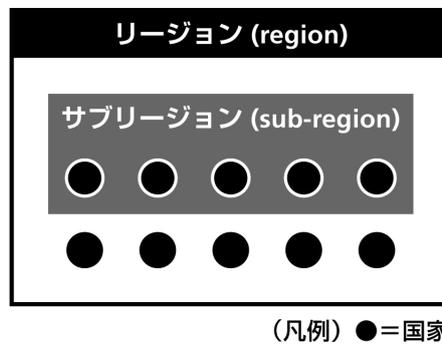
的達成に向けたポジティブな成果を獲得してきたといえる。

【まとめと結論】

3つの事例から考察すると、「東南アジアのサブリージョンにおける環境協力は、東南アジアの域外国や域外国を含む国際機関の関与がある場合、ASEAN Way を克服し、対象とする環境問題の解決に向けたポジティブな成果を収めることができる」といえる。これは、換言した仮説と同じである。このため、本論文の仮説は、立証されたと理解できる。

仮説が立証されたことから、本研究の問題意識に対して、次のような解答を導き出すことができたと考えられる。東南アジアのサブリージョンにおける環境協力は、域外国や域外国を含む国際機関といった非リージョン・アクターの関与によって、リージョン・レベルの規範・行動様式である ASEAN Way を克服し、対象とする環境問題の解決に向けた取り組みの実施を実現・促進できる。この解答を踏まえると、サブリージョンにおける環境協力は、リージョン・レベルではその規範と行動様式のために実施困難な取り組みを実現できる優位性をもつと考えられる。

図1 リージョンとサブリージョンの概念図



出典：筆者作成。

図2 東南アジアのリージョンとサブリージョン



出典：筆者作成。

図3 東南アジアのリージョンとサブリージョンの概念図



出典：筆者作成。